

格差社会の流れ

桑野 巍

大阪に「北高南低」という見方があった。

30数年前のことだ。公共事業をはじめ何かにつけて大阪北部地域は充実しつつあるが、南部地域は遅れているということだったのだろう。とくに大阪万国博の開催で北と南の差が開いたというものだった。それでも堺市以南地域は繊維関連工業のほか、海岸部に重化学工業を誘致して、それなりに対抗したが、当時なぜか南部の住民は卑屈気味だった。以前から北部地域はプライドが高かったのに対し、南部地域の住民は北に対し嫉妬心さえ持っていたように記憶している。これが大阪の北高南低論だった。

こんな話を首都圏で活躍している大阪出身の中堅記者に話したら「今はそんなことないでしょう。関西空港も広くなることだし、今はパラレルでは」と言ったあと「東京にだって南北問題がある」ことを教えてくれた。「南というのは東京の狭い部屋を間借りして暮らす若者。北は親の家から通勤する若者。どっちがリッチだと思いますか。」と聞くので、「住居費無料の北の若者がリッチ。」と答えたら、彼は「正解です。」と笑った。何だか後輩にからかわれているようだった。

京都では北部地域の若者が地域外に出て行き、高齢化と少子化が急速に進んで伝統産業は先細り、商業も地盤沈下して南北の地域格差が一層広がり、行政も手をこまねいていると聞いた。それかあらぬか時流の中に「格差社会」とか「脱格差社会」という言葉が飛び跳ねるようになってしまった。

格差社会問題は大手新聞社が火をつけ、他のマスコミを巻き込んだとか、某大学教授が最初に言い始めたとかいわれるが、一住民一消費者からみると、目立ちたがりの知識人たちや一部の政治家たちの言葉遊びの感がする。経済学者はフリーターやニートなど低所得者層の増加、母子家庭の増加、高齢貧困層の深刻さなどと分析しているが、個人所得や資産の数値だけを論じて、格差が縮まる気配はないのではないか。いつの世でも「上をみればきりがなく、下をみてもきりがなく」のであって、どうしても格差は生じると思う。

国や地方団体も、企業や個人生活も、賃金、労働条件、能力、通勤手段など格差は大ありなのだ。学

者は「貧困者が限り無くゼロに近づくような施策が必要」というが、これは至難の業というほかないだろう。「天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず」はわかっている、経済的物理的条件の変化が激しい現実下では、ある程度の格差は止むを得ないと私は認識している。

個人の場合、住居地、学歴、職種、勤務地や能力、消費生活などの差はどうしても生じるし、企業、団体の場合もヒト、モノ、カネ、情報の受信などでも格差は生じる。「格差社会は良」を全面肯定するわけではないのだが、どんな「格差縮小策」があるのかを探りたい。

そこで発言力の強い政治家や学者、文化人といわれる方に質問する。

- 一 日本の消費性向に目をつける海外の有名ブランド店の活況をどう見るのか。
- 二 限りある石油などのエネルギー資源を節約すべきなのか、利便性を優先すべきなのか。
- 三 俗にいうヒルズ族の“資本の論理”に反発すべきなのか、反発しないのか。
- 四 モラル低下と公平税制をどう見るか。

以上4問の答を待ちたい。

社会のどの部分を取り上げるかによって、格差社会に対する視点も変わってくるだろうが、ごく普通の健全な暮らしをしている人たちは額に汗し、真面目に時には歯を食いしばって、志を高く持ちつつ生活していることを忘れてはならない。この人たちは義務を果たし、公平性を重視しているものの、必ずしも「格差ゼロの社会」を望んでいるとは思えない。ある青年は「できれば自分たちの親よりもリッチな、ゆとりある生活をしたい。これが目標。」といていたが、私はこれを聞いて日本の将来も捨てたものではないと思った。

私自身はその裏側で「格差是正に特効薬はない。格差が拡大するのであれば行きつく所まで行っても仕方がない。」と少々投げやりのだったが、青年のまっとうな目標を耳にして何だか希望の光が見えてきた。

(自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長)